爆撃と熱風、家族襲う

穏やかな朝 破る米軍機

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部 破壊された一家

1

青空の下、緑深く育った稲を風が揺らしていた。田園風景が広がる真室川町内町神ケ沢集落。1945（昭和20）年夏、この地で10人家族の一家6人が殺される空襲があったとは思いもつかないほど、のどかな光景だった。しかし松沢（現姓・高橋）キミエさん(83)は63年たった今も、あの日の爆音を、焼け崩れる我が家を、そして泣き叫ぶ妹の声を、忘れられない。

◇　◇

45年8月10日午前8時、当時20歳で7人姉弟最年長のキミエさんは、朝食の片づけをした後、茶の間で、父栄太郎さん（当時39歳）らと、ナスとキュウリの漬物をつまみ、お茶を飲んでいた。ガラス戸を開け放った南向きの茶の間には、そよ風一つ吹き込まなかった。「暑づい一日になるんだべねぇ」。そんなとりとめもない会話をしていた。

傍らでは、義母ミドリさん（同25歳）が、「姉ちゃんがいい」とだだをこねる妹アヤ子ちゃん（同2歳）を、辛抱強くあやしていた。ミドリさんは、2年前に妻を亡くした栄太郎さんのもとへ嫁いでわずか5日目。キミエさんを慕う幼いアヤ子ちゃんに心を開いてもらおうと、奮闘していた。

縁側伝いの8畳間が騒々しかった。朝食を終えたわんぱく盛りの6歳と4歳の弟2人が、相撲をとっているようだった。

「今日も畑さ頑張らねぇとな」。キミエさんは、熱い茶をすすりながら、そんなことを考えていた。

神ケ沢集落の東にある神ケ沢山を見つめるキミエさん。この山を越えて米軍機はやってきた

◇　◇

しばらくして、「バリバリバリ」という飛行機のエンジン音が聞こえてきた。「あれ、今日の訓練さ、めっぽう早ぇな」。キミエさんは誰に言うでもなく、そうつぶやいた。

家から約1・3キロ南西には、真室川飛行場があり、飛行兵たちが、実戦用の97式戦闘機や、赤トンボと呼ばれた木製複葉機の練習機で、上空を飛んでいた。だが、訓練が始まるのはいつも午前10時ごろ。2時間も早かった。

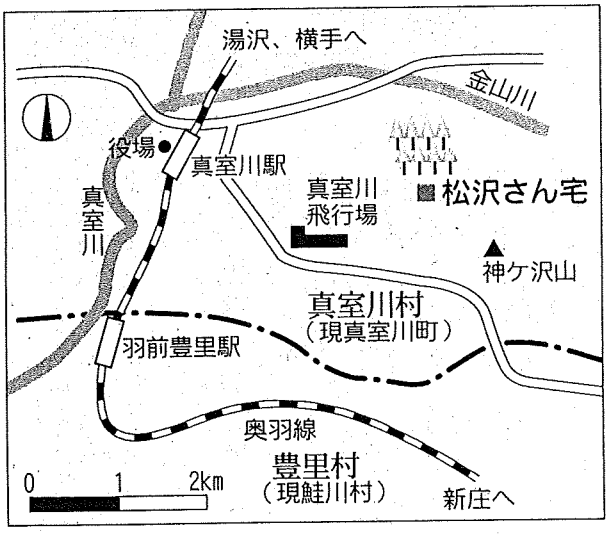
栄太郎さんたちと縁側に出ると、飛行場とは逆の東の方角から、神ケ沢山を越え3機の飛行機が、縦に編隊を組んで飛んでくるのが見えた。「何だべか」。考える間もなく、飛行機は高度を落とし、みるみる近づいてきた。

家から50㍍と離れていない田んぼの上空で、飛行帽をかぶった操縦士が、機体から顔を突き出し、辺りを見渡した。と、機体から何か落ちた。直後に「ドガン！」とものすごい音が鳴り、舞い上がる熱風とともに土砂が吹き飛んできた。

「訓練じゃねぇ！　早ぐ逃げろ！」。栄太郎さんの怒鳴り声が響き、茶の間に悲鳴が上がった。

【大久保渉、林奈緒美】

＝つづく



真室川・鮭川空襲

終戦5日前の1945年8月10日、米軍機が最上地方を午前と午後の2回にわたり行った空襲。県警察史によると、犠牲者は、真室川町（当時真室川村）6人▽鮭川村（当時豊里村）9人▽新庄市5人（当時の萩野村4人・八向村1人）――の20人。米軍の狙いは、旧真室川村の陸軍飛行練習場・真室川飛行場とされるが、飛行場には迎撃兵器が一切なく、駐屯兵の大半が不在だった。代わりに飛行場から1・3キロ離れた10人家族の松沢さん一家が標的の一つになった。

父義母妹4人死傷

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部　破壊された一家　2

雑木林に逃げたものの

「逃げることさで頭がいっぱい。幼い姉弟のことは、構ってらんなかった」

1945年8月10日朝、真室川村の神ケ沢集落の自宅で、米軍の突然の空襲を受けた松沢（現姓・高橋）キミエさん(83)は、家を飛び出した時の心境をそう振り返る。

◇　◇

爆撃の直後、父栄太郎さん（当時39歳）の「早ぐ逃げろ！」という声で、キミエさんは玄関の草履を足に引っかけ、表に飛び出した。田舎町に空襲はこないと考えていた松沢家は、防空壕を掘っておらず、隠れ場所は、自宅裏の雑木林しかなかった。

土の上を駆け出すと、また地鳴りがし、後ろから熱風が吹き付けた。砂ぼこりが一面に舞い上がり、目の前が見えなくなった。口に無数の砂粒が入ったが、むせるのも構わずに走った。

玄関から20㍍。すぐにこんもりと茂った雑木林にたどり着いた。だが、爆撃を目の当たりにした恐怖は、どうすれば安心なのかを分からなくさせた。とりつかれたように、林の奥へ逃げた。

前には、栄太郎さん、アヤ子ちゃん(同2歳)を背負った義母ミドリさん（同25歳）、妹ヨシ子さん（同11歳）がいた。木立の間を、体をぶつけながらすり抜けると、「ここらでいいべ」と栄太郎さんが声を上げ、後ろを走る娘たちを制し、その場にしゃがんだ。

栄太郎さんにならい、立ち止まり、狭い木々の間に体を押し込んだ。ひざをつきうつぶせにしゃがみ、ただただ体を低くした。頭を両手で抱え額を地面にすりつけると、後は、ただ祈った。

◇　◇

10分、20分、いやもっと長かったかもしれない。怖さで身をこわばらせていると、ふと栄太郎さんの声が聞こえた。耳をそばだてると、「本家さ呼んでこい」。そう言っているようだった。

爆弾の落ちた田んぼ跡の草むらを指さすキミエさん。穴の深さは約1.5㍍だったが、痕跡は残っていない

そっと顔を上げると、前に伏せる栄太郎さんの折り畳んだ脚が目に入った。さらに顔を上げると、体から大量の血が宙に噴き上がるのが見えた。

「お父っつあ！」。慌てて立ち上がり、回り込んだ。うつぶせになった栄太郎さんの左肩から、信じられない勢いで赤い血がビュンビュン噴き出ていた。

左には、アヤ子ちゃんを背負い突っ伏したままのミドリさんがいた。「アヤ子！　アヤ子！」。小さな体を揺すったが、反応はなかった。背中に穴が開いていた。帯で結ばれた2人は、一発の弾丸で背中から胸を貫かれ、死んでいた。

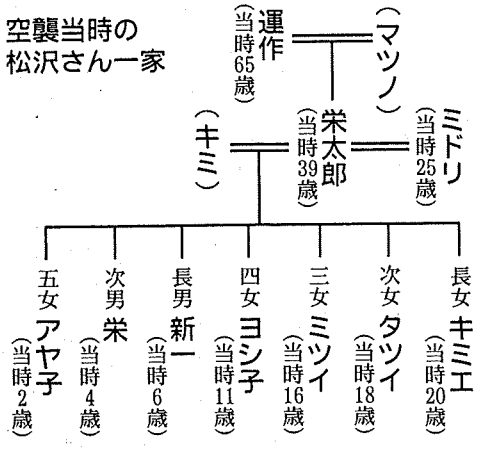
さらに左には、3番目の妹ヨシ子さんも倒れていた。同じように名前を呼んだが、返事がなかった。背中には撃たれた跡がなかった。祈る気持ちで、伏せた体を抱き起こした。だが、表を向いたヨシ子さんの顔は、跳ね返った銃弾が突き刺さったのか、右目がつぶれていた。「ヨシ子！」。揺すっても、揺すっても、反応はなかった。

◇　◇

雑木林の枝葉を縫い、所々に日が差していた。舞い上がった砂ぼこりが、その光の中をいつまでも漂っていた。空を切り裂くエンジン音は、いつか、聞こえなくなっていた。

＝つづく

空襲当時の松沢さん一家



（マツノさん、キミさんは既に死去。年齢は数え年。栄太郎さんは運作さんの養子）

「お前ら頼む」父絶命

姉妹3人で号泣

9年前に新築した家の座敷に、亡くなった家族の写真が額縁に入り並んでいた。真室川町内町神ケ沢地区。松沢（現姓高橋）キミエさん(83)の父栄太郎さん（享年39歳）は、一番右。白黒写真で、やや緊張した面持ちだ。

「仕事一筋だけど、どぶろくが好きでな、飲むと途端に明るくなった。みんな、お父っつあが大好きだったんだ」。写真を見上げ、キミエさんはポツリと語った。

◇　◇

「本家さ行ってこい。お前らのこと、頼みに行がねと」。1945年8月10日朝、米軍機の機銃掃射で左首筋を撃たれた栄太郎さんは、家の裏の雑木林で、血が噴き出すのにも構わず、キミエさんにそう繰り返した。

無事だった妹タツイさん（当時18歳）とミツイさん(当時16歳)も駆け寄った。「お父っつあ。死なないでけろ」。3人で泣き叫ぶしかなかった。

栄太郎さんの隣に義母ミドリさん（当時25歳）と妹アヤ子ちゃん（当時2歳）、3番目の妹ヨシ子さん（当時11歳）が倒れたまま、ぴくりとも動かなかった。衝撃が大き過ぎ、祖父と弟2人がいないことも気付かなかった。

◇　◇

タツイさんが本家へ走り栄太郎さんの姉を連れてきた。無事だった集落の村人にも助けられ、奥座敷から外した板戸に載せ、栄太郎さんを家に運んだ。

家の前の青田には、深さ1・5㍍、直径10㍍もの巨大な穴が三つもできていた。辺りの田んぼも土をかぶり、無残に稲がなぎ倒されていた。衝撃で茶の間が傾き、割れたガラスが散らばっていた。

板戸に乗せられた栄太郎さんは、被害を免れた奥座敷に運び込まれた。運ばれる間も、座敷に寝かされても「おらは、大丈夫。お前らのことさ頼む」と、うわ言のように唱え続けた。しかし血の勢いが弱まり、顔が青ざめ、声がか細くなり、やがて、息絶えた。

「外では暑かろう」と誰かが思いやった。もう2枚板戸を外し、アヤ子ちゃんを背負ったままのミドリさんを、続いてヨシ子さんを、同じ座敷に運んだ。

◇　◇

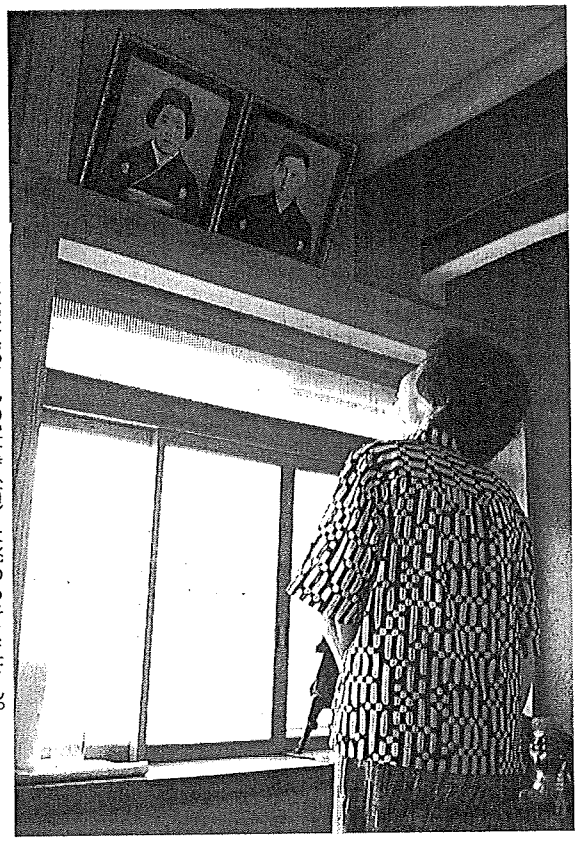
手伝いの人たちが帰り、部屋は静かになった。生き延びた安堵、家族を失った悲しみ、明日の不安。幾つもの感情が、どっとわき起こっていた。

「これから、どうすればいいんだべ」。目の前に並ぶ遺体を見て、再び涙がこみ上げてきた。「他人様には涙は見せられねぇ」と気丈に耐えていたが、ともに無事だった妹のタツイさんとミツイさんと姉妹3人だけになると、皆でわんわん声を上げて泣いた。

◇　◇

空襲から約5時間半たった午後1時半。爆撃でもうもうと舞い上がっていた砂ぼこりは落ち着いた。きのうと変わらず、空は青く澄んでいた。

だが、米軍機は再び迫っていた。　＝つづく



空襲で亡くなった父栄太郎さんの写真（右）を眺めるキミエさん。左隣は先立った前妻キミさん

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部　破壊された一家

3

〔第3種郵便物認可〕

腕枕の妹 頭撃たれ

悲しみ裂いて米軍機再来

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部 破壊された一家

4

夏の暑さとともに、よみがえるのは後悔の念ばかりという。「おれが我慢させてなかったら、死ななかったかもしんねえ。本当に、許してけろな」。真室川町内町神ケ沢集落に住む松沢（現姓高橋）キミエさん(83)は、63年前の夏を思い、ポツリとつぶやいた。

◇　◇

「バリバリバリ」。空を引き裂くエンジン音が聞こえた。その瞬間、キミエさんは家族を失った放心状態から我に返った。奥座敷には、頭をそろえ4人の体が横たわり並べられていた。家族を奪われ、家と田んぼがメチャクチャにされた。「うそだべ！」。これ以上何を壊すのか、と思った。

1945年8月10日午後1時半ごろ、米軍機は朝より機数を増やし再び襲いかかった。

頭が混乱したまま「布団さ、かぶれ」と叫び押し入れに駆け寄った。掛け布団を取り出し、全身にかぶり畳に伏せようとした時に「バーン」と激しいさく裂音が鳴った。直後、数十㍍西の隣家に、火の手が上がるのが見えた。栄太郎さん（当時39歳）らを運ぶため板戸をすべて外し外は丸見え。燃え上がる火は、やけに近かった。

めらめら燃える炎が恐ろしかった。だが朝の機銃掃射の恐怖の方が、より強かった。「見つかれば殺されんべ。逃げた時、米兵に顔を覚えられたかもしれねえ」。そばの妹ミツイさん（当時16歳）の腕をつかみ、一緒の布団に引き入れた。

◇　◇

風一つない真夏の昼下がり。頭からすっぽり布団にくるまり、じっと息を潜めていると、全身から汗が噴き出してきた。ぬぐってもぬぐっても額から玉粒のように汗が出る。服とモンペが肌にへばりつき、次第に息をつくのも苦しくなった。

「暑い、暑い。お願いだ、姉ちゃん、布団はいでけろ」。ミツイさんが何度も泣きついた。だが、米軍機に見つかれば殺されるという恐怖は、何にもまし強かった。「見つかったら、お父っつあみたいにされるぞ。もう少しで飛行機さ、いなくなる。我慢してけろ」。そうなだめ続けた。

◇　◇

2、3時間はそうしていただろうか。気付くと「暑い、暑い」とうわごとのように繰り返していた妹の声が、聞こえなくなっていた。生臭いにおいがした。ミツイさんの頭を乗せていた左腕に、ヌルリとした肌触りを感じた。びっくりし布団をはぐと、ミツイさんの右の頭が割れていた。息があるはずもなかった。姉を信じ、息が詰まる暑さと恐怖に耐えたミツイさんは、知らぬ間に機銃掃射で頭を撃ち抜かれていた。

言葉を失った。だが、悲しみにくれる間もなかった。焼夷弾で燃え上がった隣家の火の手が迫っていた。

＝つづく

空襲で亡くなった家族の眠る墓に手を合わせるキミエさん

悲痛な叫び炎が包み

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部 破壊された一家

5

真室川町内町神ケ沢集落に暮らす松沢（現姓高橋）キミエさん(83)。家の横に小さな畑があり野菊が咲いていた。この小さな畑こそ63年前に焼け落ちた家の跡だ。

◇　◇

1945年8月10日午後4時ごろ、キミエさんは、家の奥座敷で隣家から燃え移った火の海に囲まれていた。

隠れた布団の中には、頭を撃ち抜かれた妹ミツイさん（当時16歳）の亡きがらがあった。父栄太郎さん（当時39歳）ら朝の機銃掃射で犠牲になった家族のむくろも、すぐそばに並んだままだった。

「姉ちゃん 連れてってけろ」

「家族を置いて、逃げられね」。こみ上げる涙を必死で押し殺し、火の手が迫る中、もう一度、布団に潜り込んだ。だが、すぐにつま先が燃えるような熱さを感じ、思わず身をひねった。「バリバリ」。音をたて柱や壁が燃え崩れた。

もう座敷にはいられなかった。家族を残していけないが、自分が死ねば、亡くなった父や妹を弔う人もいなくなる。考え直し、立ち上がった。米軍機の機銃掃射から、少しでも身を守れるのではと端がチリチリ燃え始めた布団をマントのように首にまき付けた。だが、縁側に向かい走り始めた時、思わぬ声が聞こえてきた。「姉ちゃん、連れてってけろ」

びっくりして、奥座敷を振り返ると、もう一度同じ言葉が繰り返された。「姉ちゃん、おらさも連れてってけろ…」。消え入りそうな声。朝の空襲で目をつぶされ、死んだと思い込んでいた妹ヨシ子さん（当時11歳）だった。

「ヨシ子！」と叫んだ。だが、柱を焼き、畳を焼き、布団を焼き、家を焼く炎に包まれ、妹の姿はもう見えなかった。

もはや手のつけようがなかった。炎は我が身にも迫った。「このままじゃ焼け死ぬ」。火のついた布団を巻き付け、一人、部屋を飛び出した。

◇　◇

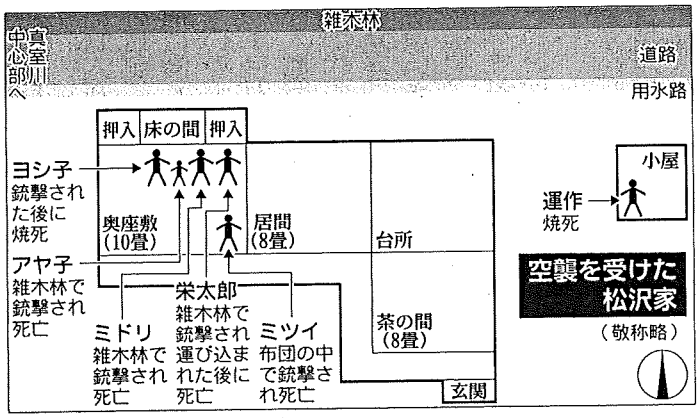
家の前を流れる幅約60チンの用水路に飛び込み布団の火を消した。一息ついて空を見渡すと、米軍機はもういなかった。用水路からはい出ると、目の前で「バリバリ」と音をたて、奥座敷から、茶の間から、勝手場から、猛烈な勢いで赤い炎が噴き出していた。

燃え盛る炎を前に、ぼうぜんと立ち尽くしていた。夕暮れが近づき、空が赤く染まりつつあった。風がそよぎ、あれほど暑かった昼が遠い昔に感じた。

◇　◇

祖父運作さん（当時65歳）は、小屋の焼け跡から翌日遺体で見つかった。他に無事だったのは、一番上の妹タツイさん（当時18歳）と、弟の新一君（当時6歳）、栄君（当時4歳）だけ。タツイさんは燃え盛る家から逃げ出していた。朝の空襲から姿の見えなかった弟2人は、飛行場の兵隊がかくまってくれていた。一家10人で生き残ったのは4人だけだった。

＝つづく



焼け崩れたかつての家の跡地を見るキミエさん。現在は小さな畑になっている

10人家族4人だけに

焼け落ちた家 白骨軽く

つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第1部 破壊された一家

6

「姉ちゃん、連れてってけろ」と頼んだヨシ子さん。「暑い暑い。姉ちゃん、はいでけろ」と叫んだミツイさん。2人の妹の最期の言葉は、真室川町内町の神ケ沢集落に暮らす松沢（現姓高橋）キミエさんの耳から今も離れない。「許してけろな」。あれから63年。キミエさんは毎月10日の月命日のたび、亡くなった妹たちが好きだった果物を、仏壇に供えている。

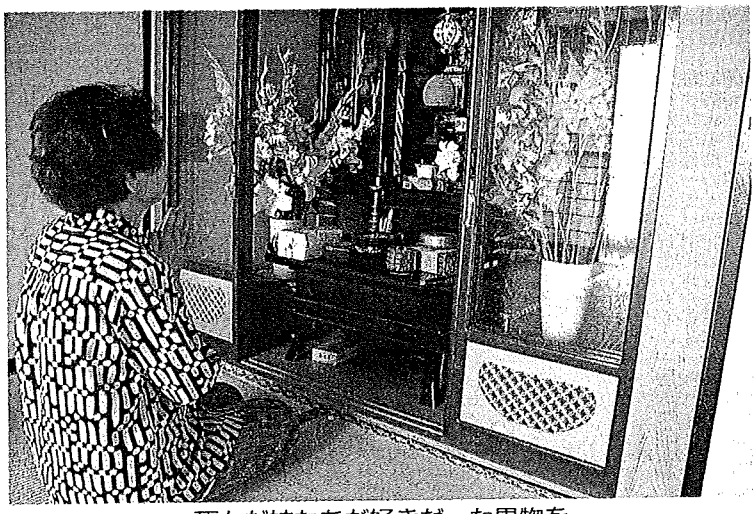
◇　◇

空襲の2、3日後、キミエさんは、生き残った妹弟3人と、家の焼け跡に家族の骨を拾いに来た。集落の5軒のうち3軒が焼けたが、キミエさんの家族の他に亡くなった人はいなかった。

空は晴れ渡り、セミは大声で鳴いていた。東の神ケ沢山も、裏の雑木林も、数日前と何も変わらなかった。だが、2年前に新築した家は跡形もなく焼け崩れ、灰と炭になっていた。父栄太郎さん（当時39歳）と汗を流し手入れした田んぼには大きな穴が開き、底から地下水があふれ出ていた。

栄太郎さんらを寝かし、妹ミツイさん（当時16歳）が機銃掃射された奥座敷。崩れ落ちた屋根や柱を押しのけると、灰まみれの白い骨が、幾つも見つかった。拾い上げ丁寧に灰を払い落とし、用意した木箱に入れた。

「熱かったべな」。肉のそぎ落ちた骨を手にすると、涙がこみ上がった。焼け方が激しかったせいか、一体そろった骨はなく、短い骨がバラバラに散らばっていた。誰のものか見当もつかなかった。



死んだ妹たちが好きだった果物を供え、手を合わせるキミエさん

声を押し殺し泣いていると、弟の新一君（当時6歳）と栄君（当時4歳）が、「姉ちゃん、また見つけたよ！」と、骨を手に走り寄った。「ここにもある」「こっちにもあるよ」。灰をかき出し、宝探しのように競い合い骨を探し回る無邪気な2人を見て、また涙が流れた。

◇　◇

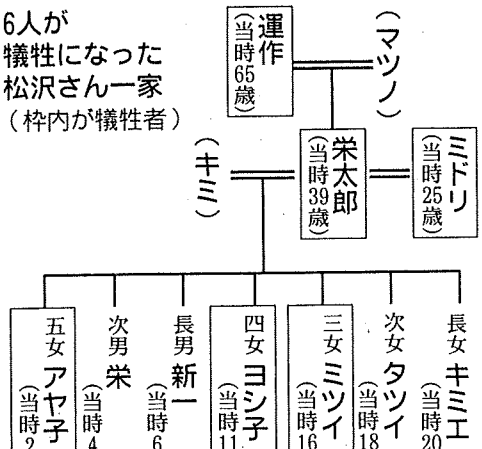
祖父運作さん（当時65歳）は、空襲翌日の11日朝、家の東のまき小屋の入り口で、焼死体で見つかった。目がほとんど見えなかったため、朝の空襲で逃げ遅れ、手探りで隠れ込んだらしい。「じっつぁ、さっぱり気づかぁねえで。ほんとに、かわいそうなことをした。許してけろ」。手を合わせ、カラスにつつかれぬよう、こもをかぶせた。

家から30㍍離れた田んぼの中の墓に、5人の遺骨と運作さんの遺体を埋葬した。骨の入った木箱は幅約50㌢。両手でやすやすと抱えられた。焼け跡で見つけた骨は残さずかき集めたのだが、5人分と思えぬ程に軽かった。

墓地では、栄太郎さんの同級生のお坊さんが読経してくれた。供養を済ませると、親類の女性が栄君を養子に引き取った。「姉ちゃんといる！」。泣いて手を放さない弟を見ると、申し訳なさで涙があふれた。栄太郎さんが生きていれば絶対に許さなかっただろう。しかし、当時18歳だった妹タツイさんと2人で、幼い弟2人を養うのは無理だった。

＝つづく

6人が犠牲になった松沢さん一家（枠内が犠牲者）



〔第3種郵便物認可〕

つめ跡は消えても

第1部 破壊された一家

真室川・鮭川空襲

7

でも語る「ひでぇ」空襲

「分かるはずねぇ、今の人に」

真室川町内町の神ケ沢集落の田んぼの中に、こんもりとした森がある。1945年8月10日、米軍の空襲で殺された松沢栄太郎さん（享年39歳）らはここで眠る。

10人家族のうち6人が殺され63年。生き残った松沢（現姓高橋）キミエさん(83)の元には、悲劇を聴きたいと何人も訪れた。だが、キミエさんは問い掛ける。「語り継いで何になる？　今の世の中、話聞いて真剣に思ってくれる人が、いるかや？」

そう考えるのには訳がある。約30年前、頼まれて取材を受けた。だが、その後、キミエさんの話を読んだという人から言われた。「小説みたいな話だべ。よくじょんずにまとめたなあ」。軽口だったかもしれない。だが、以来、二度としゃべるまいと誓った。

◇　◇

空襲から数週間後。キミエさんは、身を寄せた親類の家を出て妹タツイさん（当時18歳）と弟新一君(当時6歳)を連れ、3人で神ケ沢集落に戻った。泣く暇はなかった。焼け残った民家の1部屋を借り、姉弟3人が食べるために、寝る間も惜しみ働いた。ダイコン、ジャガイモ、カブ。食べられるものは何でも植えた。「親がいないからってバカにされたぐねぇ」。その一念で頑張った。

畑のジャーマンアイリスの咲き具合を確かめるキミエさん。80歳を超えた今も早朝の畑仕事を欠かさない

3年後には、2歳上の高橋袈裟義さんと結婚。夫婦で働き、3人の娘にも恵まれた。袈裟義さんが亡くなった今は、長女や孫夫婦らと6人で暮らす。早朝畑に出て、野菜や花を世話し、幼稚園のバスが来れば、3歳になるひ孫を見送る毎日だ。

◇　◇

だが、亡くなった家族に、何も出来なかった無念さと、何か出来たかもしれなかったという申し訳なさは常につきまとう。

「姉ちゃん、連れてってけろ」。燃え盛る炎の中で救いを求めたヨシ子さん（当時11歳）。「熱い熱い。姉ちゃん、布団はいでけろ」と泣きついたまま、銃弾で頭を撃ち抜かれたミツイさん（当時16歳）。2人の妹の最期の声は、胸に突き刺さった。

「姉ちゃんがいい」とだだをこね続け、雑木林で短い人生を閉じたアヤ子ちゃん（当時2歳）。そのアヤ子ちゃんを背負い、松沢家に嫁いで5日目で殺された義母ミドリさん（当時25歳）。

父栄太郎さん（当時39歳）は、死ぬ間際まで自分たちを気にかけてくれた。祖父運作さん（当時65歳）を置いて逃げたことは、悔やまれてならない。

◇　◇

仏壇には、毎日絶やさず、育てたユリやジャーマンアイリスなど色とりどりの花々を飾る。毎月10日の月命日は、妹たちが好きだった果物を供える。戦後63年、キミエさんは、ずっとそんな供養をし、生き残った〝罪〟を償ってきた。

「分かるはずがねぇんだ、今の人たちに」キミエさんは突き放すように言う。だが、こうも言う。

「でも、本当は、半分ぐらいは分かってほしいんだ。こんなひでぇ空襲があったということを」

◇　◇

「真剣に読んでくれる人も、いっかな」。キミエさんはそう信じ取材を受けてくれた。

【大久保渉、林奈緒美】

＝第1部おわり